

2 本門と久遠実成

法華経には何重もの構造があり、後半の本門では本門八品のそれぞれが大事とされる当宗以外では、一般に寿量品をことさら珍重いたします。それは久遠実成の教えを述べていて、本門の正宗分として中心とされているからです。

この如来寿量品の寿量というのは、詮量、つまり量をはかるということで久遠本仏の無限の寿命の量をはかるという意味です。ちょっと矛盾した言い方ですが、有限に即した無限のいのちを持つ仏を顕するのがこの品の中心命題なのです。

前にだいたい、その内容を記した宝塔品で、釈尊は「如来の肉体は間もなく滅びる、この法華経を譲り、弘通を委嘱する（付嘱）時が迫った。今や、その時に至った、誰か弘経を希望するものは名乗り出よ」と、釈尊の滅後にご弘通をする者を募られました。その後、滅後の弘通は多くの困難が伴うことを示され（六難九易）ました。その後の堤婆達多品第十二では、仏法の上では一番の悪人とされる堤婆達多（自ら新仏となったと宣言して僧伽の分裂をはかり、釈尊の命を奪おうとした）と、八歳の龍女が即身成仏したことが説かれます。この龍女の成仏は、女人の成仏を顕し、これは聴衆の菩薩が六難九易の説法を聞いて弘通の意欲を喪失するのを恐れて釈尊が説かれたのです。勸持品第十三では、この娑婆世界に旧くからいる二万の菩薩の弘経の誓い、さらに阿羅漢、比丘尼等が他の世界で弘経する旨の誓いが立てられ、また、八十万億の数多くの菩薩が仏の滅後にあつて法華経弘通の時に必ず現われる三類の強敵が迫害するであろうが、これを忍んで弘通いたしますという誓いが述べられます。そして、安楽行品では、これらの誓いを立てた菩薩の忍耐力がいくら強くても、三類による難を忍ぶのは困難なので、そのような難の及ばない安楽な修行法を教えようと安楽行品第十四が説かれるのです。

そして寿量品の前の従地涌出品第十五では、他方の国土からきた菩薩方が、もしお許しがあれば娑婆世界でご弘通をいたしましよと申し出たところ、釈尊は、「止みね、善男子」と止められて、滅後の法華経のご弘通はあなた方の任ではなく、実はこ

の娑婆世界には、既にこの経を弘める使命を担っているものがあるのだといわれるのです。そして、大地が震裂して現われたのが、上行（ヴィシシュタ・チャーリトラ）、無辺行（アナンタ・チャーリトラ）、浄行（ヴィシュツダ・チャーリトラ）、安立行（スプラティシュタ・チャーリトラ）という四菩薩をリーダー（導師）とする無量百千万億の菩薩です。この菩薩方は大地から湧いた菩薩というので、地涌の菩薩といわれます。

この四菩薩をはじめ地涌の菩薩は、皆、釈尊と同じように金色に輝き、三十二相（三十二種好相）という仏にしか現われない特徴を有しており無量の光明を放っているのです。そして、弥勒菩薩がこれらの地涌の菩薩はいったいどこから、どんな因縁があって来られたのか、また、誰がこれらの菩薩を教化して導いてこられたのか、どんな法を修習してきたのかと問います。

この問いに対して、釈尊は、彼らは皆、この娑婆世界で釈尊ご自身が教導されてきた弟子であり、娑婆世界の下の虚空に住んでいたのだと答えられます。

この答えに対して、釈尊が菩提樹の下でお悟りを得られてから、それほどの時間が、四十余年しか経っていないのに、これだけの数の菩薩を教化して来られたとはとても信じがたいということです。さらに、釈尊が二十五歳とすれば百歳のように見えるほどの姿をしているのにどういふことでしょうかと問いを發します。

これに答えられて説かれるのが、この如来寿量品です。

ここで、釈尊は「一切の人々は、釈迦牟尼仏はシャカ族の王子の身分を捨てて出家して、菩提樹の下の道場で悟りを得て僅かな時間しか経っていないと思っているが、実はそうではない、成仏して已来、無量無辺百千万億那由佉劫という時間が経過しているのである。」と、無限の過去、久遠に成仏を果たしている仏であったのだと真実を明かされるのです。

その時間がどのくらい長いものであるかを、五百塵点劫というたとえで説明をいたします。那由佉は千億を意味し、劫は梵語でカルパといい長時間の単位を意味する言

葉です。五百塵点劫とは五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界をくだいて、すりつぶして微塵となし、東の方に進み五百千万億那由佗阿僧祇の国を過ぎて、その内の一塵（一粒）を下しておき、さらにまた東方に行き、とうとう一塵もなくなった時、それまで過ぎ去ってきた世界をことごとく塵として、その一塵を一劫とする。その全体の塵はどのくらいあるか分からないくらいですが、それと等しい劫というのは気が遠くなるほどの長時間ですが、それより百千万億阿僧祇劫以前に成道し悟っているのだと言われるのです。

つまり、如来の命はそれほどの過去から続いているのであり、その間、衆生の救済をし続け、法華経を説きおわった後、ご入滅をされた後も永遠に救済を続ける仏であると宣言をされるのです。

つまり、過去久遠からの救済活動、現在の衆生に対する救済、未来の衆生の救済をあわせて説かれるのです。

そして、なぜ永遠の命をもって救済を続ける久遠本仏が、入滅の姿を顕すのかといえ（実の滅度にあらざれども而も唱へて当に滅度を取る）、それは人々に仏に対して恋慕渴仰の思いをいだかせるためであり、方便だからです。もし、如来が久しく生きてきたままでおられるならば、誰でもおごりほしいままにして飽きてしまいなかなか遭いがたいという想い（難遭之想）や、敬い（恭敬）の心を起すことがなくなってしまうということになります。

このことを良医病子のたとえをもって釈尊は説明をされますが、概略を申し上げますと「一人の名医があり、沢山の息があつた。用事があって、他国に赴いたとき、子供達が誤って毒薬を飲んでしまった。非常に苦しみ悶えていたが、その時、父の名医が帰り、本心を失ってしまった子や、まだ失っていない軽い症状の子もいた。助けを求め子を見て、名医は薬草の色や香り、美味がそなわったものを調合して与えた。本心を失っていない子はこれを飲んで治ったものの、本心を失っている子は飲もうとしない。毒気が深く入り込んで分からなくなっているからである。そこで、一計を案じ

て、その薬を枕元に置き、他国にまた出かけて、使いの者に父の名医は既に死んでしまったと告げさせた。これを聞いて、失心してしまった子達も大いに憂い、孤独感に襲われ、悲しみ、ついに我に帰り毒から醒めた。「自分の病を治してくれるものは、もはやこの薬しかない」と悟って、薬を服用したところ、たちまち治ってしまったのである。父は、子どもの病気が癒えたことを聞いて、急いで帰国して再会して喜び合ったのである。」

この名医のしたことは、みな方便であって、決して嘘偽りをいったとして罪を問うことはできない。実は不滅のいのちを如来は持ちながらも方便の力によって滅度を現すのであると結んでいるのです。

この後、寿量品では、偈頌（詩文）によって、補足をしながら再度、このことを繰り返して説かれますが、これが有名な「自我偈」です。この「自我偈」は、古来から珍重して読誦されている部分ですが、当宗では読誦は不要とされているので読みません。

この寿量品で顕された仏、久遠の本仏は歴史上の釈尊の本体ともいえる仏で、同時に法華経や法華経以外で説かれるさまざまな仏の根源の仏様です。法華経では沢山の過去仏とって、過去に出現された仏様の名前が出ています。日月灯明仏、燃灯仏、大通智勝仏、空王仏、多宝如来、威音王如来、日月浄明德如来、雲来音王如来、雲来音宿王華如来などで、原始仏教以来、過去仏思想があり、釈尊以前から真理を悟った仏陀は過去にも存在したという思想があったといえます。それは、仏陀という言葉自体が仏教のみに限らず、インド一般の宗教でも使用されていた普通名詞であることから推理できるのです。

また、未来仏思想というものもあり、弥勒仏は五六億七千万年後に出現される仏として信仰されてきました。また、法華経以前に説かれたといわれる爾前経では主役として登場し、また、法華経にもその名がみえる阿弥陀仏や阿叉仏など、東西南北、四維（東南、東北、西南、西北）、上下の国土の仏が説かれています。

これらの多くの仏が法華經寿量品に現われる久遠本仏に見事に統一されるのです。

さらに、法華經の久遠本仏という仏が、他の經典に説かれる仏と異なるのは、久遠本仏が基本的には報身であるという点です。正確に言えば、三身即一の報身本仏といえます。報身というのは、サンボガカーヤ (sambhoga-kāya) というサンスクリットの訳ですが、修行の結果悟りを得られた仏身つまり仏の身体という意味です。他の經典では、釈尊の残された教法を仏陀の一種の身体として法身というようになりました。仏教学者の認めるところでは、釈尊のご入滅直後、仏身については、この法身と生身 (色身) の二身説が唱えられるようになったとされます。その後、仏身に対する考察がすすみ、法身 (ダルマカヤ、 dharma-kāya) は真理そのもの (法性、真如)、仏陀の生身はこの法身から衆生の救済のためにこの世に応現した応身 (化身、ニルマナカヤ、 nirmāṇa-kāya) とされるようになり、さらに報身を仏が実際の修行の結果、得られた仏身として説くようになったといえます。これを、法報応の三身説と申します。法身は永遠の真理であるので始めも終わりもない無始無終の仏身、応身は始めがあり終わりもある有限な有始有終の仏身とされます。報身は、仏になる原因となる行を積み、その結果の報いとして完全な功德をそなえた仏身 (因行果徳身) で、因行という始めがあり、終わりのない永遠の真理と一体となったのですから有始無終といわれています。そして、法身は理を、報身は智を、応身は悲 (慈悲) を象徴するとされます。

法身が永遠性を有すること、法身の非寿は諸教の常談といわれ、いわば仏教の常識であるけれども法華經では久遠の昔に成道した本仏が永遠性、常住性を有することが特徴です。

法華經の久遠本仏は、報身であるのですから始めはあるのですが、その始めが過去久遠という始めなき始めですから、特別な報身ということになります。また、未来にも永遠の救済活動を続ける仏ですから、常住の仏ということになります。

法身というのは、いわば觀念上の仏であり、具体的ではなく人格を持たないのですが、報身は信仰の対象となり得る人格をそなえ具体的な修行をともなっている仏なの

です。そこに、私たちのお手本としてどんな修行を、どのように実践したら良いかが明確になるから有難いのです。本仏が久遠の昔に成道される前に最初にされた修行、つまり私たちと同じ凡夫であったときの修行をすれば私たちは良いのですが、そのお手本の修行こそ、信心なのです。

四信五品抄には「信の一字を詮と為す」とあり、信こそ久遠本仏の修行、本因妙であることを明らかにされています。